

開業医医療研究会報告

老人の慢性硬膜下血腫の保存的治療

田島正孝

田島クリニック

慢性硬膜下血腫について名古屋大学名誉教授の景山直樹先生の執筆された脳神経外科の教科書より引用し説明したい。

一般に軽い頭部外傷(時には尋ねられるまで忘れてしまっているほどの軽いものもあり、ときにはどうしても頭を打った記憶のない例もある)の後2週間から6ヶ月の無症状の経過の後に頭蓋打ち圧亢進症状を現してくるものである。40～60代に多発する。圧倒的に男性に多く、大体90%位である。またアルコール多飲者、脳萎縮の強い人に多発するといわれている。多くは一側性であるが16%に両側発生が認められる。高齢者の症状は頭痛をよく訴えており、うっ血乳頭もみられることもあるが精神症状(記憶障害、失見当識など)が前景に出ることが多く、これを放置しておくと、次第に嗜眠状態となり、最後には意識を失ってくる。他覚的にはやはり反対側の軽い運動麻痺を証明する事が多い。

診断はCTである。両側性で脳と同じ吸収域の場合には診断困難な場合もあるが、脳外科医がみれば見落としは少ない。

治療は一般にはやや大きめの一つまたは二つの穿頭を行い、硬膜ならび血腫外膜を切開し、血腫

内容液を排除し、その後約24時間ドレナージをしておくのが普通の手術法である。高齢者では、慢性硬膜下血腫手術後1ヶ月以内に死亡する例もあり予後は70歳以下に比べあまりよくない。

脳硬塞にて半身麻痺を生じた70歳以上の人で入院治療中にリハビリをされていて転倒したりして、慢性硬膜下血腫を生じた症例を4例経験した。4例とも明らかな慢性硬膜下血腫の症状(頭痛や精神症状)を示さず、脳硬塞の定期的なチェックのためCTを行ったところ、見つかった。そして4例とも脳硬塞のあるのと同じ側に慢性硬膜下血腫を認めた。血腫の症状のない事、リハビリのため長期入院が予想される事により、穿頭術による血腫除去を行わず、最初の1週間はグリセオール200cc+デキサメサゾン5mgの点滴を朝夕2回、それ以後は2週間から2ヶ月の間グリセオール200cc点滴1日1回施行し、4例とも3週間から2ヶ月の間に血腫は消失した。

脳硬塞で半身麻痺のある高齢者では転倒し頭を打ちやすいことと、慢性硬膜下血腫を生じやすいのでCTによる定期的な検査が必要である。またリハビリによる長期入院のため保存的治療行なうのがよいと考える。